

多文化共生モデル地区

市では、地域と連携しながら、多文化共生のまちづくりを推進していくため、3つのモデル地区を選定。重点的に多文化共生事業を実施しています。

●沖水地区～生活安全交流会～

6月26日(日)、外国人住民と高校生などの日本人ボランティアが参加し、日本の交通ルールやごみの出し方、災害などについて共に学びながら交流を深めました。



●祝吉地区～日本文化体験・日本語支援～

「一般社団法人霧島山麗活性化人材育成協会」が、技能実習生を対象に、日本の文化を体験しながら日本語を学ぶ教室を定期的開催しています。



●小松原地区～日本語講座(初級)～

市内在住の外国人住民の中には、日本語を全く勉強したことがなく、日常生活で大変な苦勞をしている人もいます。

そこで、日本語を全く勉強したことがない外国人住民を対象に、日本語講座(初級)を開催します。

●日程 11月7日(月)～12月8日(木)

●場所 小松原地区公民館

このまちで暮らして いくために ～多文化共生のまちづくり～

市では、国籍や民族などの異なる人同士が、互いの文化的な違いを認め合い、そこに住む人たちが等しく、安心・安全に暮らすことができる「多文化共生」のまちづくりを目指しています。今回は、市内に暮らす特定技能外国人のインタビューなどを通して、多文化共生について考えます。

◎問い合わせ 地域振興課国際化推進室 ☎23-2295

日本語教室に参加するテッテッポウさん

そんなトウさんの趣味はカメラ。休みの日には、お気に入りのカメラを片手に、街に散歩に出かけます。「写真を撮りに行くと、声をかけられることもあります。こんなにちがうとか、日本語が上手ですねとか。そこから一緒に写真を撮ることもあります。普段、仕事以外で日本人と話す機会がないので、話しかけてもらえてうれしいです」とトウさんは笑顔を見せます。「これからこのまちで、一生懸命に働きたい。そして、私もこのまちの住民として、日本人と笑顔で豊かな生活を送りたい。そのためには、もっと日本語の勉強を頑張ります」と、目を輝かせながら語ってくれました。

「やさしい日本語」に挑戦してみよう

ステップ① 日本人にも分かりやすい文章にする

- ・情報を取捨選択し、整理する
- ・3つ以上のことを言うときは、箇条書きにする
- ・外来語の使用に気をつける

ステップ② 外国人にも分かりやすい文章にする

- ・二重否定や受身形、使役表現をできる限り使わない
- ・難しい言葉や専門用語は使わない
- ・漢字の量に注意し、振り仮名をふる

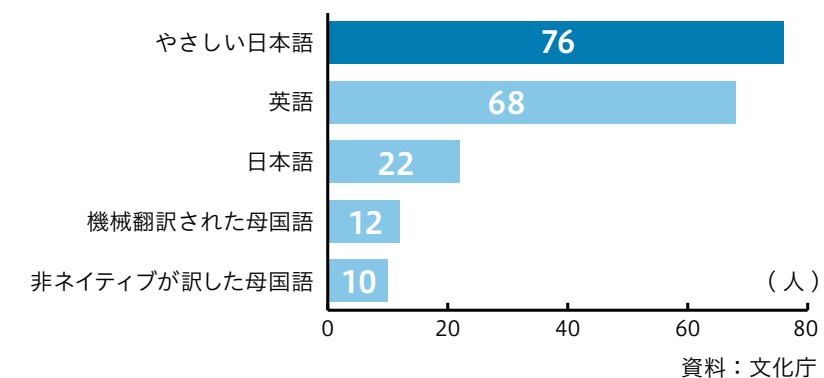
ステップ③ 日本語教師や外国人にチェックしてもらう

このまちの一員として 笑顔で暮らしたい

祝吉地区公民館で行われている日本語教室。ここで日本語ボランティアの先生と向き合うのは、2年10ヵ月前から特定技能外国人として市内で暮らす、テッテッポウさん(ミャンマー出身)です。

普段、会社の寮で生活するトウさんは、近所の日本人になかなか声が掛けられないことを、もどかしく感じていました。「もっとたくさんの人とつながりたい」という思いから、仕事が終わってから日々勉強に励んでいて、日本語能力試験(日本語を母国語としない学習者を対象とした日本語能力を測定する試験)の、一番難しいレベルであるN1の試験合格を目指しています。

外国人100人が希望する情報発信言語(複数回答有)



※難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮した分かりやすい日本語

本市の外国人住民数は、平成25年8月時点の782人から、令和4年8月現在では1823人と約2.3倍に増加。その国籍も、約40カ国と多様化しています。

多文化共生社会を実現するためには、外国人住民だけでなく、日本人も地域に住む外国人への理解を深めることが大切です。文化庁の資料によると、外国人が希望する情報発信言語として「やさしい日本語」を選んだ人は76%、英語を選んだ人は68%となっています。外国人とコミュニケーションを図る言語は、英語だけではなく、やさしい日本語などを用いて心を通わせましょう。